

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04278

研究課題名（和文）記述的規範の認知的過程に関する検討

研究課題名（英文）Cognitive processes of perceived descriptive norms

研究代表者

村上 史朗（Murakami, Fumio）

奈良大学・社会学部・教授

研究者番号：30397088

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：人々が規範を遵守するか逸脱するかを決める際に、周囲の他者がどの程度その規範を遵守しているかの認知（記述的規範認知）が規定因のひとつとなっていることが知られている。しかし、その認知が正確であるとは限らない。本研究では、記述的規範認知と実際の規範遵守率が乖離する要因として、主としてその行為（規範を遵守しているか否か）が周囲から観察可能であるかに注目し、そのメカニズムを検討した。研究結果から、観察可能性の低い規範では記述的規範認知の歪みが大きくなることが明らかになった。また、記述的規範を推測する際、直前に意識していた異なる規範と関連付けて推測することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的な規範が遵守されるか否かは、個人の倫理観で決まるというよりも、周囲の他者がどの程度その規範を遵守しているかという認知を通じて、一種の「相場観」が形成されやすい。しかし、その認知（本研究では「記述的規範認知」）は正確であるとは限らない。歪んだ認知に基づいて我々は規範に従うか否かを判断していることもある。本研究では、その認知の歪みをもたらす要因として、その規範的行為を遵守しているかを周囲から観察しやすいかどうか注目した。観察しづらい行為については直接的に遵守率を把握できないため、認知バイアスが生じやすいことから、行政等で把握している情報の周知が必要であることが示唆される。

研究成果の概要（英文）：Previous studies revealed that one of the determinants of people's decision to comply or deviate from a norm is their perception of the extent to which others around them comply with that norm (perceived descriptive norm). However, this cognition is not always accurate. In this study, we examined the mechanism of the discrepancy between perceived descriptive norm and actual norm compliance, focusing mainly on whether the behavior (whether or not the person complies with the norm) is observable from the surroundings. The results of the studies revealed that distortions of perceived descriptive norms are greater for norms that are less observable. In addition, it was shown that when people infer descriptive norms, they do so by associating them with different norms that they were aware of immediately before.

研究分野：社会心理学

キーワード：記述的規範 逸脱行動 情報的影響 認知バイアス

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景にある目標は、規範の共有はいかにしてなされるかを記述することであった。規範という用語は社会心理学の内部に限定しても多義的に用いられており、価値観、態度、行動を含んだ用いられ方をされるが、本研究では行動の共有認知という観点から規範の共有を捉える。古典的で素朴なモデルとしては、価値観や態度が行動に反映されるとされているが、必ずしも社会的な態度の平均値と行動の平均値は一致しない。例えば、沈黙のらせんモデルや集合的無知(pluralistic ignorance)モデルが示しているように、世論分布には歪みが生じうるし、その歪んだ世論認知を判断基準として行動指針を決めることも多いと考えられるためである。このような社会的な行動共有の認知は、個人の価値観や態度の集積とは離れて成立しており、還元的でない一種の社会的な指標として捉えうる。

具体的には、本研究では社会的な行動共有に関する認知について、Cialdiniらの規範的行為の焦点理論(A focus theory of normative conduct: Cialdini, Kallgren, & Reno, 1991)に基づいて検討した。規範的行為の焦点理論において社会的規範は、明示的に推奨される行為や禁止される行為を示す「なすべき」規範である命令的規範(injunctive norms)と、多数の成員が実際にする行為である記述的規範(descriptive norms)に分類されている。このうち、記述的規範は行動共有の認知(人々が実際にどのような行動をとるかに関する認知)を媒介して規範的機能を持つものである。規範的行為の焦点理論において、人々は常に記述的規範を参照しているわけではないが、そこに焦点を当てる手がかりが与えられた場合に、記述的規範を参照点として行動を決めるとされている。本研究の目的は、記述的規範を中心として規範的行為の焦点理論の精緻化と拡張を図ることである。

### 2. 研究の目的

具体的には、規範的行為の焦点理論で明確にされていない2つの点について検討することが目的となる。1つは、記述的規範が人々の行動選択に及ぼす影響の認知的過程を検討することである。Cialdiniらの一連の研究や、応募者自身が関与した研究(例えば、村上ら, 2012; Murakami, 2012)では、記述的規範が行動選択に影響を持つことは示されているが、その過程については検討されておらずブラックボックスになっている。このことが問題となるのが記述的規範認知と社会的な行動頻度(現実の記述的規範)に乖離が生じる場合で、(1)記述的規範認知が実態から乖離する条件、(2)記述的規範が人々の行動選択に影響する認知的過程のモデル化、について未だ明らかとはなっていない。もう1つは、複数の記述的規範が参照可能な場合に、どれが参照されるのかという問題である。社会的行為は、多くの場合に複数の枠組みで解釈しうる。例えば、冷房の温度を上げるという行為は節約という枠組みでも捉えうるし、電力不足に対応する向社会的行為としても捉えうる。前者の場合、他の節約行動についての記述的規範が手がかりとして用いられやすく、また後者の場合、他の向社会的行為についての記述的規範が手がかりとして用いられやすくなると考えられる。1つの規範的行為について複数の記述的規範を参照しうるという点は規範的行為の焦点理論の射程には含まれておらず、新たに検討する必要がある。

以上の問題について、本研究では、以下の点を検討することを目的とする。

まず、行動面での記述的規範と記述的規範認知の乖離については、(1)乖離の大きさに影響を与える要因の検討、(2)両者が乖離している場合、行動選択に及ぼす影響はどちらが強いのか、またその影響の強さはトピックや状況要因によってパターンが異なるかの検討、の2点を扱う。

また、複数の記述的規範が参照可能な状況については、行動面で同一であっても複数の参照フレームが存在する問題について、参照フレームの顕現性をプライミング等の手法により操作する実験的手法により、行動選択(意図)に影響を及ぼすかを検討する。

併せて、記述的規範と類似した効果を持つ、文化的規範における「知覚された合意性」についても、本研究と同様の認知的メカニズムになっているかを検討する。

### 3. 研究の方法

本研究では、記述的規範認知の性質について、主に以下の2点に注目した検討を行った。(1)まず、行動頻度としての記述的規範と記述的規範認知の乖離の大きさを規定する要因を、調査研究によって検討した。(2)複数の規範が関連する行為において、どの記述的規範が参照されるかについて、参照フレームの顕現性を操作した実験的な要素を含む調査研究を行った。

#### (1) 記述的規範と記述的規範「認知」の乖離を生じさせる要因の検討

特に注目する要因として、規範的行為の可視性(観察可能性)を中心に検討した。規範的行為の可視性とは、当該の行為が社会的に「見えやすい」行為かという問題である。可視性の高い行為(自動車の速度違反など)は、現実に周囲の他者がどのような行為をしているかが見えやすいため、記述的規範認知は実際の記述的規範からずれる程度は低いと考えられる。一方、可視性の

低い行為は、部分的な手がかりから周囲の他者の行動頻度を推測することになるため、記述的規範認知は現実の行為頻度の分布である記述的規範から乖離しやすいと考えられる。

記述的規範認知のバイアスに影響する要因としては、自己奉仕的バイアスと行為の観察可能性が考えられる。記述的規範認知に関しては、自分が他者よりも社会的に望ましい行為をしているとみなす方向でのバイアスが生じると考えられる。また、プライベートな場面で行われるなど、行為の観察可能性が低い場合には、他者の行為頻度を直接観察することが難しいため、周辺の手がかりから記述的規範を推測せざるを得ない。そのため、観察可能性の高い行為に比べてバイアスが大きいと考えられる。

## (2) 記述的規範認知の解釈フレームの効果

記述的規範認知が異なる規範に般化した効果を持つかについて、複数の解釈フレームの顕現性を実験的に操作することによって検討した。特定の行動について記述的規範の情報が得られない場合、類似の行動についての記述的規範を手がかりとして用いることが考えられる。そのとき、どのような行動を「類似した」行動と捉えるのかによって、参照情報は変わりうる。

ここでは、類似性を判断する参照情報として、解釈フレームの顕現性を操作する。具体的には、「エアコンの温度設定」という規範について、「節約フレーム」と「環境配慮フレーム」の2つのフレームを設定した。節約フレームでは、節約に関連する行為の記述的規範が、環境配慮フレームでは環境配慮行動の記述的規範が、それぞれ参照されると予測した。そして、2つの参照規範との関連性について、その顕現性を実験的に操作した。実験的なデザインではあるが、大学生サンプルのみではなく多様な回答者からデータを得ることが望ましいため、条件操作を伴うインターネット調査を実施した。

## 1. 研究成果

### (1) 記述的規範と記述的規範「認知」の乖離を生じさせる要因の検討

観察可能性に注目し、観察可能性の高い行為（自転車右側走行・自転車歩道走行）、観察可能性の低い行為（後部座席シートベルト・ペットボトル分別・不在時照明オフ）、逸脱行為のみ観察可能性の高い行為（エスカレーターで片側を空ける・電車内で着信に出る）について、本人の規範遵守頻度と世間の規範遵守頻度の推測値、規範遵守に関する一般的価値観を測定した。

本人の規範遵守頻度と世間の規範遵守頻度の推測値の差を検討したところ、すべての規範について、本人の遵守頻度の方が世間の遵守頻度推測値よりも高く、自分が世間一般よりも規範を遵守していると捉える自己奉仕的な傾向が確認された。また、そのギャップの大きさは、観察可能性の低い行為・逸脱行為のみ観察可能性が高い行為の方が、観察可能性の高い規範よりも大きいことが確認され、仮説が支持される結果となった（表1）。

表1 各規範の行為頻度（本人と世間の推測）の平均値

観察可能性	項目	本人の行為頻度	世間の行為頻度(推測値)	本人と世間の差	t検定有意確率
逸脱高	エスカレーターに乗るとき、片側を空ける	8.97	6.96	2.01	$p < .01$
逸脱高	電車内で携帯電話に着信があったら電話に出る(*)	2.59	4.69	-2.10	$p < .01$
高	自転車に乗るとき、道路の右端を走行する(*)	3.31	4.47	-1.15	$p < .01$
高	自転車に乗るとき、歩道を走行する(*)	4.85	5.74	-0.89	$p < .01$
低	自動車の後部座席に乗ったとき、シートベルトをする	5.27	4.38	0.89	$p < .01$
低	ペットボトルを捨てるとき、キャップを別にして捨てる	6.78	4.38	2.40	$p < .01$
低	自宅で、部屋を離れるときには短時間で照明を消す	6.36	4.10	2.27	$p < .01$

note: (\*)は頻度が高いほど望ましくない行為であることを意味する。

### (2) 記述的規範認知の解釈フレームの効果

本研究のデータは、関東・関西の1都2府5県の20歳から64歳の男女1200名を対象としたインターネット調査を通じて得られた。フレームの操作は、環境問題への信念(6項目)、節約への信念(6項目)への回答を求めることを通じて行った。エアコン温度設定(冷房時に27度以上)、環境関連規範(エコバッグ使用、ペットボトル分別廃棄)、節約関連規範(部屋の照明を消す、ジェネリック医薬品の使用)の各規範について、「一般的な他者は10回機会があったら何回行うと思うか(記述的規範認知)」「あなたは10回機会があったら何回行うか(本人の行動頻度)」を測定した。

冷房の温度設定に関する記述的規範認知を目的変数とした重回帰分析を行った。環境先行条件では、エコバッグ、ペットボトル、照明オフの記述的規範認知が有意な効果を持っていた。一方、節約先行条件では、ペットボトル、照明オフ、ジェネリック医薬品の記述的規範認知が有意な効果を持っていた。この結果から、環境フレームでは冷房の温度設定は環境関連の他の規範と類似した記述的規範認知となり、節約フレームでは節約関連の他の規範と類似した記述的規範認知となるという仮説は部分的に支持された。

### (3)その他の結果

新型コロナウイルスの感染予防行動意図に影響を与える要因の検討に、本研究の枠組みが適用できる可能性を検討するため、当初の計画にはない調査を実施した。コロナ禍の感染予防行動の中には、「数分前にアルコール消毒をした状態で、別の店に入店する際にアルコール消毒を求められる」のように、実質的な効果が期待されないケースも存在する。このような状況で感染予防行動を取る場合には、効果への期待よりも周囲の他者を安心させるという目的によるものと考えられる。このタイプの感染予防行動に影響を与える要因として、文化的自己観の共有信念の効果を検討した。周囲の他者が相互協調的自己観を持っているという信念の強さが、効果の期待できない場合に感染予防行動意図を持つことに繋がると予測した。また、併せて効果が期待できない状況で感染予防行動を取る人への印象も測定した。これは、効果が期待できない状況で感染予防行動を取ることは、他者からの良い印象に繋がっている可能性を検証することを目的とした。

調査の結果、予測した相互協調的自己観の共有信念の効果は確認されなかった。一方、予防行動を取る人への印象は、複数の予防行動について一貫して予防行動を取らない人よりも良かった。この結果は、効果が明確でない場合にも対人的な印象評価を懸念して感染予防行動を取る人が多いことを示唆している。ただし、この結果は日本人大学生のみを対象としているため、他のサンプルでも確認することが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Miyajima, T & Murakami, F.	4. 巻 12
2. 論文標題 Self-Interested Framed and Prosocially Framed Messaging Can Equally Promote COVID-19 Prevention Intention: A Replication and Extension of Jordan et al. 's Study (2020) in the Japanese Context	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.605059	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上 史朗	4. 巻 45
2. 論文標題 記述的規範における認知バイアス：行為の観察可能性の効果の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 151-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 文化的自己観の共有信念と感染予防行動意図の関連の検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 顕在的・潜在的自尊心の不一致と集団主義傾向の関連
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 新しいルールの遵守を促進させる方略
3. 学会等名 応用哲学会第10回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 新しいルールの遵守を促進させる方略
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 記述的規範における認知バイアス：行為の観察可能性の効果の検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 記述的規範認知のバイアスと関連する要因の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fumio Murakami
2. 発表標題 Pluralistic ignorance in descriptive norms: The effect of visibility of the behavior
3. 学会等名 International Association for Cross-Cultural Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 村上史朗
2. 発表標題 記述的規範認知に対するフレームの効果
3. 学会等名 日本社会心理学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 唐沢穰・松村良之・奥田太郎 (編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 26
3. 書名 責任と法意識の人間科学 (第8章「ルール遵守の促進要因と抑制要因」分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------